

## 『更級日記』における富士山の描写

〈静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 准教授 青木 慎一〉

『更級日記』は平安時代の貴族女性である菅原孝標女<sup>すがわらのたかすえのむすめ</sup>によって書かれました。高校の古文の授業で『源氏物語』を全巻読みたいと願う少女の話に触れたことがある人も少なくないかもしれませんが、菅原孝標女<sup>かんこう</sup>は寛弘5年(1008)の生まれで、『源氏物語』を作った紫式部や『枕草子』を作った清少納言より一世代後の人物に当たります。菅原道真<sup>まつえい</sup>の末裔で、父の菅原孝標が上総介<sup>かすさのすけ</sup>に任じられたことで、寛仁元年(1017)から同4年(1020)までの3年間を上総国(現在の千葉県)で過ごしました。父の任が明け、京に帰ることになったのは彼女が13歳の時でした。その時の上京の旅路が日記に綴られています。

関東から都へ東海道を進む道のりの中、富士山については以下のように記されます。

富士の山はこの国なり。わが生ひ出でし国にては西面<sup>にしおもて</sup>に見えし山なり。その山のさま、いと世に見えぬさまなり。さまことなる山の姿<sup>こんじやう</sup>、紺青を塗りたるやうなるに、雪の消ゆる世もなくつもりたれば、色濃<sup>きぬ</sup>き衣<sup>あこめ</sup>に、白き<sup>けぶり</sup><sup>のぼ</sup>裯<sup>たひ</sup>着たらむように見えて、山のいただきのすこし平らぎたるより、煙は立ち上る。夕暮は火の燃えたつも見ゆ。

平安時代の仮名日記は現代の日記と違い、貴族社会の中で読まれることを前提として書かれており、物語のような創作された文章も含まれるため、解釈が難しいところもありますが、以下読み解いていきましょう。

「富士の山はこの国なり」の「この国」は昔の駿河、現在の静岡を指します。そして、「わが生ひ出でし国にては西面に見えし山なり」と、自分が育った(上総の)国では西の方角に見えていた山だと続けます。そして、山容を「いと世に見えぬさまなり。さまことなる山の姿」と、世にまたとない格別な姿と評します。孝標女にとって富士山は3年間上総(千葉)から見ていた山で、上洛の途において目の当たりにしたのでした。3文とも断定の助動詞「なり」で結んでおり、遠景として見ていた富士山を眼前にした衝撃が伝わってきます。余談ながら、私も当センターに着任するまでは新富士駅付近の新幹線の車窓から見える富士山に感動していましたが、富士宮から見る富士山の大きさや迫力には圧倒されました。

続く形容は「紺青を塗りたるよう」の部分です。「紺青」は天然の鉱石から採れる鮮やかな青色の顔料で、和田律子氏は『竹取物語』や『蜻蛉日記』などにわずかに用いられる語であり、異国の情緒漂う高価な輸入品であったことを指摘します(注1)。では、なぜ富士山の山肌をそのような品物の色<sup>たと</sup>で<sup>た</sup>え<sup>た</sup>た<sup>の</sup>で<sup>し</sup>ょう<sup>か</sup>。平安時代の絵画で富士山が唐<sup>とう</sup>の山水画の手法で描かれていたことが一因に挙げられますが、都の人に馴染みがある山といえば比叡山<sup>ひえいざん</sup>であり、それとは一線を画す山を表現するために、別世界を髣髴させる舶来品<sup>ほうふつ</sup>を用いたと考えたいところです。

また、「白き裯」も注意を要する表現です。裯は着物と着物の間に着用する丈<sup>かざみ</sup>の短い衣服ですが、着る対象の解釈が分かれています。現代の注釈書類の多くが上に着る汗衫を略した装いの童女としますが、先に引いた和田律子氏は童女の裯は赤などの色の着いたものが通例で、白い裯を着るのは老人の男性であることを検証し、白い衣を身にまとう聖なる翁<sup>おきな</sup>のイメージが富士山の聖なる山の神秘性につながるとの見解を示しました(注2)。ここでは童女か翁かの判断を保留



しますが、孝標女が仕えた<sup>ゆうしなしいんのう</sup>祐子内親王に身近な存在である童女の清浄さ、神さびた翁の神秘性、あるいはそのいずれもが富士山に重なってくるのです。

「雪の消ゆる世もなくつもりたれば」や「山のいただきのすこし平らぎたるより、煙は立ち上る」は紺青や白き<sup>けむな</sup>裃と異なり、当時よく用いられた表現に沿っています。「富士の嶺<sup>ね</sup>のならぬ思ひに燃えば燃え神だに消たぬ空し煙を」(『古今和歌集』)や「時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿子<sup>かのこ</sup>まだらに雪のふるらむ」(『伊勢物語』)のように、峰から上がる噴煙や季節に関係なく降り積もる雪は、富士山に対する平安貴族の共通認識でした。「夕暮は火の燃えたつも見ゆ」も古今集歌にあるように、噴火によって「燃える」と表現される和歌のパターンを踏襲したとも認められますが、「夕暮」という時間表現を伴うことから、孝標女の実体験に基づく文脈と見ておきたいと思います。

最後に、「色濃き衣」を取り上げましょう。「色濃き」が何色であるのかが難しいところです。単に「色濃き」という場合は、諸注釈が説くように紫色か紅色を指します。また、少し前に「紺青を塗りたるよう」とあることから、「紺青」を受ける可能性も考えられます。穏当な解釈としては紫や青が想定されますが、さまざまな色が浮かぶ曖昧な表現をあえて使っている点に留意すると、季節や時間、気象条件などによって多彩な山景を見せる富士山を3年にわたって眺めてきた孝標女の実感に基づく工夫と捉えてみたくもなります。文章をたどると、「紺青」の青、「色濃き」の紫、雪や裃の白、夕暮と火の赤と、実に多くの色が配されていました。紺青との関係からすると除外される紅色も、「色濃き」からの連想に限れば、山と雪の紅白の取り合わせが頭をよぎるかもしれません(赤富士や紅富士の写真、絵画、イラストなどと通じるものがありはしないでしょうか)。

『更級日記』における富士山の描写は、概ね鮮やかな青色の山肌に白い雪が積もり、山の峰から噴煙を上げる姿ということになります。しかし、丁寧に言葉を検討してみると、实景を都の人の認識に即して表現しつつも、巧みな言葉の選択によって色彩豊かに多様な光景やイメージを喚起する独自の物語的な記述であることが分かりました。また、富士山の活火山としての様相を伝える平安時代の貴重な記録という側面も持っています。みなさんがイメージする富士山はどのようなものでしょうか、この機に振り返ってみてもらえたらと思います。

注1:和田律子「上洛の記(その二) 富士山—あこがれとおそれと—」(『藤原頼通との文化世界と更級日記』新典社、2008年)

注2:和田律子「上洛の記(その三) 富士山—「白き裃」ということ—」(同上)

※『更級日記』・『古今和歌集』・『伊勢物語』の本文は、新編日本古典文学全集(小学館)を引用しました。

#### 【主要参考文献】

- ・関根慶子『講談社学術文庫 更級日記(上)』講談社、1977年
- ・秋山虔『新潮日本古典集成 更級日記』新潮社、1980年
- ・三角洋一『日本の文学 古典編 更級日記・建礼門院右京大夫集』ぼるぷ出版、1986年
- ・守屋省吾『有精堂校注叢書 更級日記』有精堂出版、1987年
- ・吉岡曠『新日本古典文学大系 土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・更級日記』岩波書店、1989年
- ・犬養廉『新編日本古典文学全集 和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』小学館、1994年
- ・伊藤守幸『更級日記研究』新典社、1995年
- ・小谷野純一『更級日記全評釈』風間書房、1996年
- ・原岡文子『角川ソフィア文庫 更級日記』角川書店、2003年
- ・福家俊幸『更級日記全注釈』KADOKAWA、2015年

